

ムスリム同胞団研究をめぐって

1. はじめに

一昨年（1987年）5月のエジプト人民議会選挙における三派連合（労働党・自由党・ムスリム同胞団）の躍進は、ムスリム同胞団の基盤と影響力の大きさを改めて内外に示すものであった。2年ぶりに筆者が訪れた1987年11月のエジプトは、ちょうど各大学における学生自治会選挙とニカーバと呼ばれる各種組合の役員選挙とが実施されようとしていた時期であった。結果的には、5月の選挙と同じく、これらの選挙でも指導部のイスラーム色の濃さ、つまり同胞団ならびにイスラーム協会の力量の大きさが明らかとなった。

加えて、昨年末から続くイスラエル占領下でのパレスチナ人の抵抗運動は、エジプト国内で反イスラエル・ムードを高め、議会、大学、そして市中デモとなって波及した。これは、1985年のアキレ・ラウロ号事件前後に盛り上った反イスラエル感情のうねりと恐らく同じ程強いものであろう。こうしたムードの広がり、IMFとの協議のもとで進められている各種補助金の削限に伴う諸物価のはね上りに苦しむ庶民の不満を少しは吸収するが、むしろイスラーム勢力による反政府感情の表出、つまりイスラーム・ムードを一層拡大させる好機を与えている。

これらとほぼ同時期に持ち上ったザキー・バドル内相（前アシュート県知事）とジャーナリスト協会との対決は、上記各種選挙後の事態に対する政権側の対応としてとらえることができる。つまり、ムバーラク政権のもとで享

受されてきた一定の言論の自由（実態は野党紙発行の自由とそこでの発表の自由）、そして「民主主義（デーモクラティーヤ）」をこの時点で再検討（再調整）しようとするものであろう。しかし、政府・与党（国民民主党）の間で必ずしも意見の一致が見られない。それは、旧選挙法違憲判決に伴う新「地方政府法（Qānūn al-Hukm al-Maḥallī）」の作成をめぐる首相と与党指導者の間に対立が続いたことから想像できる。

やや長々と書き連ねてきたが、それは革命以前、とくに戦間期におけるムスリム同胞団の急速な拡大と、70年代後半以降における同胞団の伸張との背後にはともに構造的には同じような環境が存在していたのではないかとの問題意識からであった。ナセル時代をはさんで、サダト時代末期以降、今日のエジプト政治を特徴づける、いわゆる多元化ないし複数政党制 (Ta‘adudīyah Siyāsīyah, Ta‘adudīyah al-Aḥzāb) と革命前の「議会制 (‘Ahd Barlamānī)」との間には共通した政治構造があったのではないか。戦間期ムスリム同胞団の研究にとって、この問いは、52年革命以降の現代史の流れを踏まえて同胞団をとらえ直す意味で不可欠になっている。これはワフド党についても同じことであり、エジプトの若手研究者の間でワフド党をとらえ直そうとする試みがすでに出始めている。¹⁾

2. ナセル革命と同胞団

かつてガブリエル・ベアはエジプトの政治・社会変動について論じた時、統合機能をもった中間集団の存在に着目した。ベアによれば、エジプトはムハンマド・アリー以降推進された近代化＝中央集権化の過程で、それまで統合機能を担ってきたウラマーをはじめとする集団・階層が中央政府によって解体されていった。その機能はあらたに官僚組織にとって代えられるに至るが、国家（＝エリート）と民衆とを接合させたかつてのウラマーのような仲介者の役割は演じ切れなかった。その結果、近代化を享受した一部の官僚・

インテリと残りの大部分の民衆との間には文化的断絶がより顕著になった。農村における血縁的つながり、および社会全体では宗教およびエスニシティ面での人口の同質性が統合を促がす要因として存在してはいたが、中央政府と民衆を結びつける有効なチャンネルを欠落させたことが長期的に不安的要因として大きく作用するのではないか、との悲観的解釈を下した。²⁾

1952年革命後成立したナセル体制は、エジプトの近・現代史において土着性を備えた初めての政権であり、地方の中産階級との親和性を通じて第2次世界大戦以後、ことに1948年のパレスチナ戦争以後の混沌とした国内状況を秩序づけることに成功したとされた。そして、1954年の政治危機を乗り越えてからは、国内には政権に対抗しうる組織的勢力は存在しなくなった。にもかかわらず、その後設立された国民組織たる解放戦線 (Liberation Rally)、国民連合 (National Union)、およびアラブ社会主義連合 (Arab Socialist Union) のいずれにおいても、国民の下からの運動にまで発展させることはできなかった。それらは、せいぜい一部の政治エリートの派閥政治の道具と化すか、官僚主義に形骸化されたものとなった。むしろ旧秩序を支えた社会層に序々に浸透されていった点こそ重要な側面であろう。

なぜ、ナセル体制が「失敗」したのかという設問は、革命政権であれ前体制の、つまり広く言って、過去の負債を背負って、さまざまに制約された環境の中で進路を選ばざるを得ない以上、解答は容易ではない。だが、中央集権化された巨大な官僚機構のもとで、中間集団の活動領域が狭められ、バラバラにされた国民が指導者によって直接上から動員される社会のあり方に少なくともひとつの「失敗」の原因を求めることができよう。同時に、そこには、ムスリム同胞団が1954年および1964～5年の2度にわたる弾圧にもかかわらず、なぜナセル政権下で生き残り続け、70年代に再びエジプトの政治・社会生活で確固とした地位を取り戻しえたのかという設問の解答もかくされている。

3. 1923年憲法体制と同胞団

前節でナセル政権の脆弱さについて問いを投げかけたが、同様に1923年憲法体制下の政治・権力構造を問題にすることにより、ムスリム同胞団の戦間期における強さを外側から把握することができる。より具体的に述べれば、同体制下で民族運動の唯一の指導者とされる「国民」（あるいは「大衆」）政党であったワフド党が、ボイコットした選挙を除くと、ほとんどの選挙で圧倒的多数を占めたのはなぜなのか。アラブ世界にあって代表的なナショナリズム政党とされる同党について、いまだ研究は十分であるとは言えない状況にある。どのような選挙戦を同党は展開したかという基本的な事実も判明してはいない。

ナショナリズムと政党の2要素を内包させたワフド党は、1923年憲法体制下で内実を変化させていく。すなわち、同憲法は一方で、国民（ウンマ）主権を基本的特徴としてもちながら、他方では、イギリスの従来からの権益の維持を認めることから生れる緊張関係を内在させていた。この枠組の中にワフド党は取り込まれ変質していくのであった。ことに、1930年代以降著しくなる都市化現象によって、大都市においては既成政党が組織し動員しうる能力に限界が生じてくる。政治的利権をめぐる政治権力抗争に明けくれる既成政治勢力に不満を抱く急進的な政治・社会集団が23年憲法体制に挑戦する。

時あたかもパレスチナでアラブ人の反乱が発生し、これがエジプト国内のナショナリズムにパン・アラブ、パン・イスラーム的ムードを色濃くし、国内権力抗争のために都市部のこうしたムードを操作する傾向が生れつつあった。とくにイスラームが政治の世界に重要な要素として持ち込まれた。同時に、長年の国家的課題であった対英関係、つまり対英交渉は、ワフド党政府のもとで1936年条約として結実した。同条約は、エジプトの国際的な地位を大いに高めるものではあったが、近づく大戦のもとで、現実にはイギリスの軍事的プレゼンスは相変わらず厳然たるものであり、国民のナショナリズム

感情を傷つけざるを得ない。その結果、ワフド党の立場が不利なものに追い込まれる。

まさに、この1936年条約締結を象徴的な転換点として、さらにこれに続く1942年 2月 4日事件を促進剤として、ワフド党は既成勢力の中核として、新勢力の攻撃目標となる。

ナショナリズム政党たるワフド党が展開した独立運動の目標が、1936年条約の締結によって、ほとんど実現される形となった。そして、30年代初めから顕在化しはじめたさまざまな内政上の問題に具体的に取り組むべき時期が到来していた。経済的・社会的改革を要求する主張が同条約締結後の1930年代末にあらわれたが、ワフド党をはじめとして既成政党は何ら新しい綱領を掲げることはできなかった。むしろ、新たに出現した青年エジプトやムスリム同胞団などの側で国内の経済・社会・政治問題への包括的なプログラムが提示されたのであった。

その結果、都市部を中心としてこれらの急進的民族運動がさまざまな社会層をひきつけていった。だが、ムスリム同胞団や青年エジプト運動が、どのようにして人々を組織化したかについてはいまだ明らかにはされていない。更に、ワフド党が村のウムダ層を中心として地方をおさえたと言われるが、度重なる分裂で同党が地盤を弱める中で、ムスリム同胞団は農村社会でどのような活動で組織化を試み、どれほどの影響力をもっていたのか、についても問われねばならない。これは、地方や農村におけるワフド党と同胞団の支持基盤がどのような関係にあったのかという問題でもある。

4. おわりに

以上のように、ムスリム同胞団研究は同胞団そのものの研究とその外部環境の研究との二つを照らしあわせることによって、相互に補完しあいながら、進めることができよう。

[注]

- 1) 例えば、カイロ・アメリカ大学のモナ・マクラム・ウベイド (Muna Makram 'Ubayd) による "Mustaqbal al-Wafd 'Ala Kharīṭah Miṣr" (al-Wafd, 1987 年12月25日) を参照。
- 2) Menahem Milson ed., Society and Political Structure in the Arab World, N.Y., Humanities Press, 1973 所収の Baer 論文 "Basic Factors Affecting Social Structure, Tensions, and Change in Modern Egyptian Society."